



関西学院にとっての聖和史①

四人の創立者

原 真和

2009年4月1日、学校法人関西学院と学校法人聖和大学は、合併しました。そのことによって、聖和という名のもとに歩んできた人々とキャンパスは、関西学院という共同体の新しいメンバーとなりました。聖和の名は、聖和大学の学生たちが卒業した後も、キャンパスの名前として、また、聖和キャンパスにある短大、幼稚園、保育所等の名前として、続いていくことになりました。聖和の歴史を形成してきた数多くの天上と地上の卒業生や旧教職員たちは、今なお、聖和の名とそれが意味するところに心を寄せています。この合併によって、聖和の歴史は、関西学院の歴史に合流し、上記の学校等に加えて、教育学部にも受け継がれ、関西学院という共同体の新たな歴史を形成していくことになったのです。

聖和の名は、1941年に会衆派（組合派）の神戸女子神学校とメソジスト派のランバス女学院が岡田山の地で合併した際、それを「聖なる和合（Holy Union）」ととらえ、新しくできた学校を聖和女子学院と名づけたことに始まりますが、その歴史は、1880年にさかのぼります。その名前に表れているとおり、聖和は、会衆派とメソジスト派という二つの教派的背景をもっています。1941年5月27日、聖和女子学院の開校式が行われました。聖和は、その日を創立記念日としてきました。

上記のランバス女学院は、1919年、神戸で開催された南メソジスト監督教会日本宣教部年会において広島女学校保姆師範科とランバス記念伝道女学校の合併が決議され、1921年、大阪市上本町六丁目付近に校地を購入、大阪府知事より認可を受け、保育専修部が先に開校、1923年、同地に当時としては大変立派な新校舎が完成、神学部を並置し、名実ともに成立しました。

このように、聖和は、複雑な歴史をもっています。すなわち、三つの学校を源流とし、二度の合併を経て、聖和という名前の学校になったのです。

聖和は、四人のアメリカ人女性を創立者としてきました。神戸女子神学校を創立したジュリア・ダッドレー（Julia Elizabeth Dudley, 1840-1906）とマーサ・バローズ（Martha Jane Barrows, 1841-1925）、ランバス記念伝道女学校を創立したメアリー・イザベラ・ランバス（Mary Isabella Lambuth, 1832-1904）、広島女学校保姆師範科を創立したナニー・ベット・ゲーンズ（Anne Elizabeth Gaines, a. k. a. Nannie Bett Gaines, 1860-1932）の四人です。これらの女性たちは、また、神戸女学院、関西学院、広島女学院の歴史とも、深い関係をもっています。



1873年3月、切支丹禁制の高札が撤去された翌月、タルカット（Eliza Talcott, 1836-1911）とダッドレー<写真右>は、横浜、大阪を経て、神戸に到着、同年10月、花隈の旧三田藩士前田兵藏方で英語、唱歌、聖書等を教える私塾を始めました。その私塾は、1875年10月、タルカットを校長とする、独立の校舎をもった女学校（神戸ホーム、現神戸女学院）となり、1876年、ダッドレーの従妹バローズ<写真左>が加わりました。1880年10月、ダッドレーとバローズは、神戸ホームを出て、花隈の借家で、6人の生徒たちとともに、女子聖書学校を始めました。ダッドレーは、アメリカン・ボードのクラーク（Nathaniel George Clark）幹事宛の書簡の中で、これを「女性たちのための小さなクラス」と呼んでいます。神戸女子神学校の人々は、このクラスを自分たちの学校の原点としました。ランバス女学院と合併して、聖和となってからも、聖和は1880年を創立の年としてきました。

タルカットは、その前月、1880年9月、岡山伝道の要請を受け、神戸を去っています。彼女は、その後、高梁、鳥取、広島、京都、ハワイ等で働きました。そして、1902年から75歳で亡くなる1911年まで、神戸女子神学校で教え、神戸で葬られました。

1930年代の前半に、神戸女子神学校は、神戸女学院とともに、神戸の地から岡田山に移転しました。移転当時は、本館、寄宿舎、宣教師館、日本人教師住宅の4棟から成っていました。現在は、旧本館（4号館、ダッドレーチャペル）と旧宣教師館の2棟が残っており、西宮市の都市景観形成建築物に指定されています。

ランバス記念伝道女学校の創立者メアリー・イザベラ・ランバスは、ジェームズ・ウィリアム・ランバス

(James William Lambuth, 1830-1892) の妻であり、関西学院の創立者ウォルター・ラッセル・ランバス (Walter Russell Lambuth, 1854-1921) の母である女性です。



ニューヨーク州出身のメアリー・イザベラ・マクレラン (M. I. McClellan) は、20歳の頃、教師となり、ミシシッピ州に赴きました。その地で彼女は、ある日曜日の朝、海外宣教の重要性を訴える説教を聞きました。そして、献金かごが自分の席に回ってきたとき、「5ドルと私自身を海外宣教のために献げます」と紙に書いて、入れたのです。その当時、5ドルは大金で、女性が海外宣教に赴くという観念もまだありませんでした。その地でメアリーは、同じく海外宣教を志していた J. W. ランバスと出会い、結婚しました。1854年5月、夫妻はニューヨークを出港、喜望峰、インド洋を経て、同年9月、上海に上陸しました。彼女にとって、それは初めての子どもをやどしての長い船旅でした。同年11月10日、上海で、息子 W. R. ランバスが誕生しました。

ランバス・ファミリーは、32年という長い間、教育や医療をとおして中国の人々のために働きました。1886年、一家は、日本での宣教を希望し、南メソジスト監督教会から日本に派遣されることになりました。同年7月、J. W. ランバス夫妻が、同年9月、W. R. ランバス夫妻が、順次来日し、神戸の居留地47番に居住しました。メアリーはすでに53歳になっていました。1887年、一家は、住居を神戸の山二番に移し、メアリーは、そこで日本の女性たちに、英語、聖書、音楽、裁縫、料理等を教え始めました。1888年、南メソジスト監督教会日本宣教部は、メアリーの教室を婦人伝道学校とし、彼女をその校長としました。これが、後にランバス記念伝道女学校と呼ばれる学校の始まりです。その翌年、1889年、兵庫県知事の許可を得て原田村に関西学院が創立されました。

彼女を記念して、聖和キャンパスの山川記念館2階にある教室兼チャペルが、メアリー・イザベラ・ランバスチャペルと命名されています。



船員であった砂本貞吉 (1856-1938) は、サンフランシスコで洗礼を受けました。1886年、広島に帰った砂本は、借家の1階を伝道所とし、2階に私塾広島女学会を開きました。砂本は、J. W. ランバスの協力を取り付けていました。翌1887年、校舎を移転させ、私立英和女学校 (後に広島女学校、現広島女学院) と改称しました。日本への女性宣教師の求人に応募したゲーンズは、同年、南メソジスト監督教会から派遣されて来日し、広島英和女学校を手伝うために、W. R. ランバス夫妻に伴われて広島にやってきました。1889年、やむなく一時休校となりましたが、南メソジスト監督教会日本宣教部はゲーンズを広島英和女学校の初代校長に任命し、学校は上流川町に再移転、再開されました。

1891年、広島市内でただ一つの幼稚園が閉園されたことを契機に、ゲーンズは幼稚園開設を決意しました。彼女は、神戸に赴き、頌栄保姆伝習所 (会衆派、現頌栄短期大学) の第1回卒業生黒田しなと教員の甲賀ふじを伴って、広島に戻りました。9月、開園にこぎつけましたが、台風のため園舎と寄宿舎が倒壊。翌月、不審火によって残っていた校舎が全焼しました。翌1892年、幼稚園設置が認可され、校舎、講堂、寄宿舎、園舎が再建されました。1895年、保姆師範科開設。これが、後の聖和短期大学保育科と聖和大学教育学部幼児教育学科の原点です。



1919年、広島女学校の保姆師範科はランバス記念伝道女学校と統合され、大阪に移転することが、日本宣教部年会で決まりましたが、それはゲーンズの提案によるものでした。ゲーンズは、広島に残り、広島で亡くなり、広島で葬られました。彼女は、広島女学院の校母として、今も敬愛されています。



1940年、大阪のランバス女学院は、愛国婦人会から土地建物の譲渡を迫られ、それに応じざるを得なくなりました。1941年、神戸女子神学校は兵庫県に名称変更を、ランバス女学院は大阪府に廃校を、それぞれ届け出、認可され、聖和女子学院となったのです。神戸女子神学校とランバス女学院の合併は、双方にとってつらいものでしたが、そこになお神の計画への信頼と希望を見出そうとし、新しい学校を Holy Union, 聖和と呼んだのでした。

聖和の校歌「新しき歌」の作詞をした阪田寛夫は、聖和の本質を端的に言い表しています。「ああ聖和、望み、いそしみ、耐えるもの」、「ああ聖和、神と人にと尽くすもの」。

聖和の歴史は、関西学院の歴史に、より一層の広がり豊かさを、ひいては未来へのさらなる可能性を、増し加えるものと思います。

(聖和短期大学教授、聖和史編纂委員会委員長)